遥かなる歳月

曾野綾子

遥かなる歳月

曾野綾子

毎日新聞社

遙(はる)かなる歳月(さいげつ)

曾野綾子著

昭和52年3月15日　印刷
昭和52年3月25日　発行

編集人　桑原隆次郎
発行人　伊奈一男
印刷所　中央精版
製本所　大口製本
発行所　毎日新聞社
〒100　東京都千代田区一ツ橋
〒530　大阪市北区堂島上
〒802　北九州市小倉北区紺屋町
〒450　名古屋市中村区堀内町

© AYAKO SONO Printed in Japan 1977

遙かなる歳月　目次

或る忠誠　7
チェ・ゲバラの春　23
春は馬車に乗って　41
罠　57
雨の匂い　73
遙かなる歳月　89
おもかげ　107

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

慈悲海岸　125
盗掘者村のアリ　141
モハベの枯山水　157
断崖の上の人々　175
私の会わなかった人　191
葦の穴　207
日の下の人の労苦　223
あとがき　241

装幀・熊谷博人

遙かなる歳月

或る忠誠

私は、本来なら、この物語の起きた土地を明記すべきなのかも知れないが、それは後ほど、登場人物の特殊性を説明すれば、少しばかりさしさわりあることを、理解していただけると思う。私は、小説を書くために或る人の生活を暴き立てるということはできるだけ避けたいという、かなり小心で虚偽的な情熱に今でも細々ととりつかれているからである。ただ土地の名前を明記できないからといって、読者に、全くあてどのない、砂漠のような町のイメージを与える失礼はしたくない。それは東南アジアのどこかの国の、或る首都のこととお考えいただいてさしつかえない。場所をはっきりさせないからといって、私はその土地を、ハリウッドの観光映画のような描き方をしなくてすむ。なぜなら、私はその都市をかなり詳しく知っているし、あたりの風景も色つきではっきりと目に思い浮べられるからである。

それは、その首都に於ける、新しい町と古い町の接点に当る住宅地であった。古い町では大きな石造りの邸が、一年中、暑さを避けるために、窓の鎧戸を下ろしている。前庭に椰子の木や、有毒な青蛇の好む小さな池などを持つ家もある。これらの家は、天井も高ければ、部屋の面積もやたらに大きく、主寝室が四十畳敷の広さを持つものも少なくない。総じて、電燈の設備はどの家もひどくお粗末

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

である。一つには、この国の人が、あまり本を読まないからである。彼らはすばらしい自然な時間の使い手であって、夕暮にも、夜にもじっと、時の流れの中に、坐っていることができる。

いや、電燈の暗い本当の理由は、慢性的に電力が不足しているからでもあるし、別の理由は……これはあまりにも私の独断であろうと思われて公開をはばかられるのだが、つまり、この国の人々には、明るいものは、すなわち暑い、という連鎖反応があるので、螢光燈の光まで嫌うようになったのではないかと思うのである。

ところで、こういう古い家は、今言ったような理由で、夜になっても、本は読みにくいし、考えごとをするにも適していない。なぜかと言うと、これら旧式の家は、もともと高い天井に大きな扇風器があるだけで、冷房の設備はないし、あっても、極めて効きが悪い。そこで南方の麻薬のような怠惰な気分が、すっぽりと人々を包みこむ。それは人間が生きながらすべての活動を停止するというあえかな実感である。日本では、物を考えないでいるということは、実はそれほどたやすいことではない。しかし、この国では、他国者（よそもの）の私でさえ、夕暮の、或いは夜の、空気にとけ込んで、有機的な、微細な粒のようになった思いで漂うことができる。

話が横にそれてしまった。これら古い家には通常、浴槽の設備がない。家々の浴室には大らかな素焼の壜が置かれており、その中の水は絶えず少しずつ気化熱を奪われているので、ひんやりと冷えており、外出から帰って来る度に水浴をする人々に、ひそかな自然の恵みを与えている。第一、水壜は——値段にしても安いものなのだが、長い間、日光に当っていないというだけでも、この国では貴重な存在に思える。

これら古い家のあちこちの壁や天井には、守宮(やもり)がはりついている。彼らは大変、穏やかな動物で、夜、電燈の光を目当てに飛んで来る小さな虫を、目にもとまらぬ早さで、舌の先でからめとってくれ、あとは時々か細い声でちっちっと啼(な)くだけなのだが、爬虫類を嫌う人々には、やはりあまり評判がよくない。

そこで――必ずしも守宮のせいだけではないのだが――この町に住みつく外人のために、新しい住宅地ができてしまったのである。

新しい家々の外見は、国籍不明である。特徴は、家の開口部が、ずっと大きいということだ。それはこの国の風土には合わないのだが、そんなことには構っていられない。じっとりと練り上げられ、濃縮されたような太陽の熱が、まともに大きなガラス戸を撃つが、これらの家々は、その代り強力な冷房装置を持っている。守宮が家の中に侵入できにくい理由も、つまりは、窓が閉められているからなのである。新しい家は、色も明るく、軽薄ですらある。壁が青磁でテラスの部分がピンクに塗ってあったりする。蛇のひそむ池もなければ、裏庭のバナナの木さえない家もある。庭は芝生である。

八木道助夫妻が住んでいるのも、そのような新しい外人用住宅の一軒であった。ただしこの家の勝手口にはバナナが生えている。古い、この国らしい家に住みたくはあるけれど、結局は生活の便利さに惹かれて、こういうつまらない家に住んでいるの、と言う八木夫人・桂子は、今年三十五歳だが、私の三十年来の知己でもあった。つまり私は、彼女を幼稚園の頃から知っているのである。

八木夫人はどちらかというと、男っぽい性格であった。学校では秀才とは言えなかったが、この国へ来るや否や言葉の勉強を始めて、「他の人たちと比べると、決して語学の才能があるとは思えない

のに」どうにかこの国の小学校三年生くらいの教科書がわかるようになった。それで最近はもっぱら、近所の土地の子と遊んでいるので、日本人学校へ行っている二人の娘たちは、おもしろがって笑っている……。

私は八木家でもう一人懐かしい顔に出会った。八木家に長くいるお手伝いさんで、田所登美という。八木一家が外国へ転任することになった時、「登美ちゃんも一緒に来てくれるそうです」という報告を受けはしたが、こうして会ってみると、彼女の健闘をたたえてもいいような気分になった。

彼女が八木家に来たのは、もう十年も前になるという。小さかった娘たちは、母親より登美になつき、八木氏は八木氏で、いつ迄もいてくれるのはありがたいけれど、女には婚期があるから、と、彼女のために、度々縁談を持ちこんだりもした。しかし、そのどれもが気にくわなくて、登美はこの家の一員になってしまった。転勤が決った時、八木夫人はもう一度、登美を同行するかどうか思案した。経済的な面からだけ考えれば、出先で人をやとうほうが安い。しかし、登美のほうでやめると言わない限り、別れるにはしのびなかった。心配は、彼女がいよいよ結婚の相手にめぐり会うチャンスがなくなることと、馴れない気候や食べ物にどれだけ適応できるかということであった。しかし田所登美は行きたい、と言い、子供たち二人は、嬉しさのあまり、登美の両側からとびついた。

「登美ちゃんは、語学の天才なのよ」

八木夫人は私に言った。

「驚いたのよ。私も負けん気でやったけど、登美ちゃんのほうが、今じゃ、私より安く、値切って買って来るんですもの」

それは八木夫人がいかにも金がありげな服装をしていて、田所登美がいわゆるお手伝い然としているからだと考えると大まちがいであった。八木夫人は髪は男のように短く刈り、お化粧もマニキュアもしたことがない。家ではジーパンに男物のセーターという姿だったので、八木家ではしばしば奥さんのほうが、お手伝いさんと思われたのである。私は八木夫人が、外国暮しをすれば少しは変るかと思ったが——とくに南方の生活はストッキングや手袋をつける習慣がないから、マニキュアとペディキュアは日本よりももっと一般化しているので、少なくとも、その影響だけは受けたかと思っていたが——彼女は相変らず、自然のままであった。

このような、女性には珍しい強さを、私は高く評価していたが、或る意味では愛らしさに欠けると考えるべきなのかも知れない。その点、登美のほうは女性的であった。髪はいつも長く、肩にかかるほどに伸ばしていた。丸顔で、この南方では貴重な存在と思われるに違いないほど色が白い。もう三十を少し過ぎているだろうに、今でもフリルのついたエプロンが好きで、それがまた、奇妙によく似合う。

おもしろいことに、新しい家であるにも拘らず八木家には例の守宮が全室の壁にべたべたはりついていた。娘たちがわざと家の中に入れてやって、その観察を理科のレポートにしているのだという。

その夜、八木氏は七時少し過ぎに家に帰るとシャワーをあび、浴衣に着替えて、と言いたいところだが、何やら田舎のデパートで買ってきたような風情のジンベイに着替えて、居間の籐椅子にくつろぎ、

「何はともあれ、お客さまのご安着を祝って一杯ビールを飲ませてくれよ」

と早くも、私をだしにしている。

「おかげさまで、家族全員きわめてよくこの土地に同化いたしましてね」

八木氏は、少し皮肉な口調で言った。

「何しろ、うちでは東京にいる時から質素な生活をしていたものですから、ここへ来ても町の食堂の飯がうまくて仕方がないし、不潔にも強うございましてね。日本を占領したアメリカの婦人部隊が、戦争直後の日本の水道を信じられなくて、朝、歯を磨くのに、コカコーラでうがいをしたという噂がありましたけど、ここへ来ている日本人の中には、アメーバ赤痢が恐ろしさに、この暑いのに、熱い飲み物しか口にしないのもおりますがね」

私は、興味を持って訊き返した。

「アメーバ赤痢がありますの？」

「あることは、何でもあるんです。マラリアも、場所によってはありますし、コレラもそう珍しくない。ですけど、うちは、一家をあげて、土地の人の食べる物を食べ、生水をがぶがぶ飲んでますけど、あまり病気らしい病気もしませんな」

外国の土地に馴染むということは、心根の問題ではなく、才能だと私は思うことがある。才能、といっても、頭脳的な才能ではない。ある種の無謀さと、攻撃性と、物見高さに支えられた細胞の生物的な才能なのである。

その夜は、月のいい晩であった。私に与えられた寝室は、娘たちの一部屋をとりあげたものであった。

「狭くてごめんなさいね」
八木桂子は、私に謝った。
「この国でも新しい建物は面積が狭いのよ。古い屋敷だったら床運動ができるくらい大きな寝室のうちもあるんですけど」
私は窓を開けて外の空気を一杯に入れた。今は乾季で蚊はほとんどいないのだった。私のすぐ目の前には、黒々とした隣家の庭の森が、月の光に洗い流されるように広がっていた。人口数百万の都会なのだし、自動車もかなり多いのに、よくよく耳を澄まさねば、押しつぶされたような都会の騒音も、ここ迄は聞えて来なかった。
私は、隣はどういう家なのか桂子に尋ねた。すると彼女は、それが、あるヨーロッパの小さな国の大使の公邸なのだ、と説明した。
「その大使とおっしゃる方はねえ。もう六十を過ぎた方だけど、実に気さくで温和な方なの。十何年か前に、奥さまを亡くされて、それ以来ずっとお一人なんだけど、読書家で、美術がお好きで、日本に行った時に買って来たっていう見事な土佐絵の屏風なんかも持っていらっしゃるの。私たちは、何もあちらの大使館とは関係ないんだけど、うちの娘たちは、時々お庭に遊びに入れていただいたりしているのよ。子供さんがもう大きくなってしまったもんで、小さな子供が珍しくて、可愛くてたまらないらしいのね。上の娘が帰って来て《ママ、お隣のうちには土佐絵があるよ》なんて言っているの。土佐絵なんて知りもしないくせに大使に教えていただいたらしいのね。だけど実はね、ただ単にお隣さんだけの関係じゃなくて、私は、心を痛めていることがあるの。うちの登美ちゃんが、大使が連れ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com